

アルバート・ビアスタット『ヨセミテ渓谷の日没』1868年

曲目解説

Largo

家路（新世界より 第2楽章）

Antonín Dvořák（1841–1904） アントニン・ドヴォルザーク

曲目解説

Largo 家路（新世界より 第2楽章）

Symphony No. 9 “From the New World” — II. Largo ／ 交響曲第9番『新世界より』第2楽章（前半）

Antonín Dvořák（1841–1904） アントニン・ドヴォルザーク

作曲	1893年、ニューヨークで。同じ年の12月16日、カーネギー・ホールで初演 （アントン・ザイドル指揮、ニューヨーク・フィルハーモニック）
原曲の編成	管弦楽（この旋律を吹くのはイングリッシュ・ホルン）
調・拍子	変ニ長調・4分の4拍子・Largo（とてもゆっくり。4分音符＝52）
この楽譜	第2楽章のうち、「家路」の旋律が歌われる前半（1〜45小節）。旋律は、Brandon Amaro 浄書の総譜（パブリックドメイン）から入力し、Simrock 社の初版（1894年）と照らし合わせた。 ピアノ伴奏は、管楽器の和音と弦楽器をまとめた編曲

作曲者

アントニン・ドヴォルザークは、いまのチェコ、プラハに近いネラホゼヴェスという村に生まれました。若いころはオーケストラでヴィオラを弾きながら作曲を続け、ブラームスに才能を認められて、『スラヴ舞曲集』で広く知られるようになりました。

ボヘミアの民謡や踊りのリズムを生かした、親しみやすく温かい音楽が持ち味です。『新世界より』のほか、『チェロ協奏曲』、弦楽四重奏曲『アメリカ』、歌曲『わが母の教えたまいし歌』、ピアノ曲『ユーモレスク』などで知られます。

曲の成り立ち

1892年、ドヴォルザークはニューヨークのナショナル音楽院に院長として招かれ、およそ3年間アメリカで暮らしました。そこで黒人霊歌や、アメリカ先住民の音楽に関心を持ち、アメリカの新しい音楽はこうした歌をもとに生まれるだろう、と語っています。

交響曲第9番は、1893年の1月から5月にかけて書かれました。『新世界より』という題は、ドヴォルザーク自身がつけたもので、「新世界（アメリカ）から故郷へ送る便り」のような意味がこめられている、とよくいわれます。

第2楽章について、ドヴォルザークは初演のころの新聞の取材に、ロングフェローの長い詩『ハイアワサの歌』の、森の中の弔いの場面から想を得た、と語っています。旋律は民謡のように聞こえますが、借りてきた歌ではなく、ドヴォルザーク自身の作です。

のちに、ドヴォルザークの弟子だったウィリアム・アームズ・フィッシャーが、この旋律に歌詞をつけて『Goin' Home（家路）』という歌にしました。日本でも「遠き山に日は落ちて」などの歌詞で歌われ、夕方を知らせるチャイムとしても親しまれています。

曲調と聴きどころ

楽章は、木管楽器と金管楽器の、ゆっくりした和音で始まります。第1楽章のホ短調に近い響きから、いくつかの和音を経て、遠い変ニ長調へと静かに移っていきます。続いて、弱音器（音を小さく柔らかくする道具）をつけた弦楽器が、そっと和音を敷きます。

その上で、イングリッシュ・ホルンが「家路」の旋律を歌います。イングリッシュ・ホルンは、オーボエより低く、少しくすんだ温かい音の木管楽器です。旋律は、ほとんどが ド・レ・ミ・ソ・ラ の5つの音でできていて、日本の童謡や民謡にも通じる、なつかしい響きがあります。

旋律の終わりは、クラリネットやヴァイオリンが、こだまのようにやさしくくり返します。笛で吹くときも、急がずに、遠くへ呼びかけるような気持ちで、長い音をていねいにのばしてください。この楽譜はここ（45小節）までですが、原曲はこのあと、嬰ハ短調の中間部をへて、ふたたび「家路」の旋律に戻り、はじめの和音で静かに閉じます。

曲の流れ （小節番号は、この楽譜の小節番号）

小節	内容
1〜6	前奏。管楽器の和音が ppp から f へふくらみ、ホ長調の響きから変ニ長調へ移る。5小節から、弱音器をつけた弦楽器がそっと入る（笛は休み）
7〜10	イングリッシュ・ホルンの独奏で「家路」の旋律が始まる。「ミ・ソ・ソ、ミ・レ・ド」
11〜14	旋律の中ほど。少し高い所で、クラリネットが下で寄りそう。p と mf の間で、ゆるやかに揺れる
15〜18	はじめの旋律が戻る。17小節から高まって、18小節で f になる
19〜21	クラリネットが、旋律の終わりを pp で、こだまのようにくり返す
22〜26	管楽器の和音が高まり、25小節で ff の山。26小節で静まって、弦楽器へ受け渡す（笛は休み）
27〜35	第1ヴァイオリンが、旋律の中ほどを歌う。チェロが下で別の旋律を重ねる。32・33小節で高まり、35小節で静まる
36〜39	イングリッシュ・ホルンが、はじめの旋律をもう一度歌う。38小節で f
40〜45	クラリネット、ヴァイオリンのこだまが続き、ppp で消えていく（原曲は、ここから中間部へ進む）

音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

調　変ニ長調

レ♭を主音とする長調で、調号は♭が5つ（シ・ミ・ラ・レ・ソ）。前奏の和音は、ホ長調の響きから始まって、遠い変ニ長調へ移ってきます。標準の運指の楽譜は原調のままなので×が多くなります。
六本調子の楽譜はヘ長調に移してあります。

拍子　4分の4拍子

1小節に4分音符が4つ。とてもゆっくり（Largo、4分音符＝52）なので、心の中で8分音符まで数えると、「♪.♬」（付点8分と16分）のリズムがそろいます。34小節だけ4分の2拍子です。

五音音階

「家路」の旋律は、ほとんどが ド・レ・ミ・ソ・ラ の5つの音（五音音階）でできています。
日本の童謡や民謡と同じ音階なので、篠笛とよくなじみます。三本半調子・四本調子・四本半調子の笛（一がラ♭に近い）なら、曲のド（レ♭）が「四」に乗り、この5つの音が 四・五・六・1・2 にあたります。
1オクターブ上で吹くと、×の運指は4つだけです。

篠笛の楽譜と調について

同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。
篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。
笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

楽譜	内容
標準の運指版	変ニ長調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。伴奏（A＝440Hz）と合わせるときは、一 がおよそドの笛（目安：八本調子前後）を使います。
おすすめの版	三本半調子・四本調子・四本半調子（古典調）の笛のための楽譜です。原曲と同じ変ニ長調で、1オクターブ上を吹きます。伴奏（A＝440Hz）は原曲のまま合わせられます。 ×の運指は4か所です。一 の高さが近い笛は同じ指で吹けます。 笛の高さは気温や湿気で変わるので、季節やその日の笛の調子によって、伴奏と合う笛を選んでください。音ごとのメリ・カリの目安は、実測した三本半調子の値です（笛によって前後します）。
六本調子版	六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。ヘ長調（原曲より長3度上）、チューナーの基準 A＝436Hz（全体を25セント低く）。実測した六本調子の笛で、 ×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。

藤舎名玄　2026